

閑暇と人生

重 松 俊 明

1

今日は、閑暇という題目でしばらくお話ししてみたいと思います。閑暇というものが人生にとってどういう意義をもっているかということを考えてみたいと思います。旧約のアブラハムの時代の農民は、年老いて人生のたそがれ時には、あらゆることを経験しつくして、解くべき迷いもなくみな生に満ちたりて死ぬことができたといわれておりますが、20世紀の現代のわれわれは生に疲れ果てて死ぬことはできても生に満ちたりて死ぬことは、ほとんど不可能になつてきているのではないかと思うのです。まあこういう時に閑暇、暇ということの意味を考えてみるということは非常に大事なことではないかと考えるわけであります。閑暇は英語ではレジャーと言い、ふつう余暇と訳されておりますが、私がこれを余暇といわず閑暇といっているのには多少わけがあるのであります。では、余暇とは一体何かといいますと、ふつう余暇の定義はこういうことにだいたいなっております。生活の實際的需要のために働いたのち自由時間、あるいは一日24時間から仕事睡眠その他必要のために用いられた時間を差し引いた残りの時間、これを余暇という。あるいは自分のしたいことを自由になしうる時間ということが余暇というように定義されているのであります。こういう定義によりますと余暇というのは、必要な労働の余りの時間だということにだいたいなっているんです。従つて、この考え方によりますと、労働というものは第一義的なものであり、労働は目的である、それ

に対して余暇は第二義的なもので労働に従属するものだという考え方が余暇の概念の中にあると思うのです。レクリエーションというようなこともよく申します。レクリエーションは休養なんて訳されておりますが、これも休養してエネルギーをたくわえて明日の労働にそなえる、そういう意味をもっています。どこまでいっても労働ということが第一義的に考えられているということにはまちがいないと思うのです。それに対し今日、私は余暇と言わずに閑暇と言っているのは、閑暇というものは人生にとって決して労働におとらない意義があり、価値あるものだということを明らかにしたいためで、その為に余暇と言わずに閑暇とわざわざ言っているのです。そこで暇と仕事、労働と閑暇というものの歴史的考察を簡単にやっておきたいと思ひます。原始社会では大体仕事と暇 *work and leisure* というものは截然と区別されていなかったものであります。人間はここでは楽しみながら働らき、働きながら楽しむといったように、労働と閑暇というものは截然と区別されていなかった。労働に何か遊戯的な意味があったのであります。こういう状態を考えると、まあ非常にいい時代だったようですね。それで労働と余暇というふうにはつきりと区別されるようになるのは、人間の社会のずっと後の段階になってからであります。原始社会の次に出てくる奴隸制社会を見ますと、これは閑暇というものが支配階級に独占されて労働は奴隸がするというように階級的差別が現われて、労働が非常に蔑視されてき、閑暇は階級的優越を保持する象徴というような意味を持つようになりました。だからこの支配階級に属する者は、たとえば女なんかだったら爪を非常に長く、こんなに長くしたりします……。あるいは中国の纏足なんかもそのような意味をもっておると言うことができましょう。爪を長くしていれば、労働することができず、爪を長くしておるということは、つまり自分は労働をしなくてもいい階級に属しているものだ。いわゆる有閑階級、レジャークラスに属しているのだということを示すシンボルになっているわけであります。また古い中国の纏足というのは生まれた時から足をまげまして布でくくってしまつて大きくならないようにしてしまふので、こういう小さい足をしていたら労働なんかできません。よろよろして歩き、蓮歩楚々として歩くなどといっています。こう

してたくましい労働なんかできない身体になってしまう。それがむしろほこりになるのです。つまり労働しなくても済む階級だということになったわけで、しかし、この場合、こういう閑暇階級、有閑階級の閑暇というものは、奴隷制社会における支配階級の閑暇でした。中世になって身分社会になってまいりますと、ここでは労働というものが蔑視されなくなって、蔑視されなくなったといえれば多少語弊がありますが、まあ労働の倫理化とでも申しませんか、労働の美化ということがおこなわれるようになりました。

中世身分社会では、貴族、僧侶が閑暇階級になりまして、農奴農民が奴隷のように労働をすることになり、生産労働という肉体労働にたずさわるようになる。そして労働は美德であって閑暇は惡徳だというような倫理観がここでは生まれてきますが、こういう倫理観は考えてみますとやはり支配階級が支配を確立するための労働の倫理化だということにいいと思います。被支配階級は労働階級ですから労働というものは非常にいいものなんだ、美德なんだというふうにいわれば、不平不満を多少緩和される意味がありますから、そういう教化が行なわれるわけです。ところでさらにすすんで近世の資本主義社会になりますと、ここでも初期のころの資本主義社会では、労働は尊く労働第一主義というものがでてきます。資本主義社会の初期においては勤儉力行、貯蓄、こういう徳が非常にきけば、禁欲主義の倫理というものが広くゆきわたる。人は生きるために労働するのではなくて、労働するために生きるのだというふうに、労働の倫理化が行なわれる。人間は労働するために生まれてきたんだというような、言い方をするとようになります。ヨーロッパではプロテスタント倫理というものがありましてこれが労働は神聖であり、労働は天職であるというようなことを教えたのであります。マックスウェーバーという人は「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本を書いておりますがその本の中で次のようなことを言っております。プロテスタント倫理は労働を非常に価値高いものだととして、人間は労働の義務を果すことによって死後天国に行けるのだというように教え、閑暇（ひま）は惡魔の誘惑であって神の栄光をあらわすために役立つのは懈怠と悦楽ではなくて労働す

ることである。カルヴィンはまた時間の浪費は最大の罪惡であつて閑暇は罪惡であると説いております。こういう倫理觀が非常に資本主義の發達を促進したというようなことをウェーバーは言っておりますが、これは正しい説だと私は考えております。このような倫理觀は現代までずっと尾をひいてきておりまして、まあいまの日本でも50才以上ぐらゐの人は大体こういう倫理觀をもっているのじゃないかと思うのです。私などは小学校時代、二宮金次郎の銅像のある校庭で学び、やはり労働第一主義の倫理觀というものをもつておりまして余暇ないし、閑暇というものは何か悪いものだというような考え方がどうしてもあるわけであります。私は社会学という學問をやつてきましたから多少マスコミに關したことや大衆文化みたいなことの勉強もやらなければならぬというような合理化をやりながら、映画が好きでしたから若い頃よく見に行きました。私が若い頃は映画は今みたいに斜陽娛樂ではなくて、非常にはやりまして、月に二、三度も映画を見に行ったものですが、どうも映画館の前で切符を買う時に何か悪いことをしているやうな気がし、うしろめたいやうな気がいたしましたして、学生でも見ていないかとあたりを見まわしたくなるやうな気持ちがいたしましたものなのです。で映画を見ることは何か悪いことをしてゐるんだという氣持がどうしても抜けきらなかつたことを思い出しますが、私の娘にお父さんは映画をみるときにそういう氣持になつたもんだがお前達はどうかといつたら「映画をみるのが何で悪いのや」という答が返つてきたので、娘たちではだいぶ倫理觀も變つたんやなあとこのやうに思うようになりました。まあ我々のやうな教育をうけた50才以上のものには、社会の上層にも下層にもこのやうに労働は美德であるが閑暇は惡德である、この倫理觀がしみ通つてゐると思うのです。しかし考えてみるとこれはおかしいので、映画をみるのが惡であるならば、惡德であるならば、映画を作る方はもっと悪いことでなければならぬはずですから、映画を作る方は労働ですから、これは非常にいいことだといふことになる訳です。これはおかしな話ですね、映画を見るのは悪いことだが映画を作るのは、いいことだといふのは、鍵穴はいいけれど鍵は悪いと言つてゐるやうなもので、まことに不合理な話だといわなければなりません。こういう倫理觀が我々年輩の者に

はあったんです。これが20世紀の現代になってきますと、事態がだんだん変わってきて、労働は美德で余暇は悪徳だという倫理が成立しにくくなってくるのです。それは、どういうことかと申しますと、ひとつには、労働の質が変わってくるということがあります。だんだん労働が変質してきて美德だと言えないようなものにかわっていくわけなんです。機械化というものが非常に進みまして、オートメーション、システムなんていうものが現われてきますと、労働行程が非常に細分化されて働く者はただ単純な筋肉運動を反復するといったような、そういう労働になってしまうのです。このような単純な筋肉運動を反復するというようなことが労働になってしまいますと、そういう労働にたずさわっている限り人々は自己表現のよろこびというようなものを味わうことができなくなります。そしてまたそれぞれ機械にむかって孤立して働いておりますから、その間は社交性の欲求というものを充すことができず非常に孤独なさみしい状態で働くことになる。こういう状態になってきますと人間が機械を使うのじゃなくって機械が人間を支配することになり、人間と機械の位置が転倒するという事態が現われてまいりまして、人間は単なる機械の歯車ではないということになってしまいます。現代の機械労働なんかをみていますとどんな機械は発達いたしまして、できるだけは機械でやるようになり、機械でどうしてもできない部分だけを人間の手でやっているというのが今の労働なんですから、これは非常に単純な人間の品位を貶すような労働になってしまいます。そういう労働はいわゆる疎外された労働というもので、そういう疎外された労働に従事しているものにはやがてまた人間疎外という事態がおこってくるわけなんです。だから現代のような機械化された労働に従事している。労働者に、人間疎外ということが非常につきすんだ形で現われてくるということになるわけです。マルクスは100年も前に天才的な洞察力をもって人間疎外のことを述べておりますが、今みたいなオートメーションシステムなんていうものをマルクスは全然しらなかったわけですから、偉大な天才ですから当時の労働から今の疎外された労働を予見しているところがあります。マルクスは、労働者は労働において肯定されないで否定されると言っている。労働している間は、自分自身を肯定されるん

じゃなくて否定されているんだ、で幸福と感じないで不幸とを感じる。働いている限りは、幸福と感じないで不幸と感じるのだ。労働者は労働の外部で始めて自己のもとにあり、自己のもとにある *bei sich* と感じ、労働の中では自己の外に *ausser sich* あると感じる。つまり労働の外部においてですから、労働をやめた時に労働者は始めて自分が自分になったというふうな感じ方をすることができ。けれど労働している間は自分の外にいるのだ、自分が自分ではなくなっている、そういう感じをもつんだ、これは大変労働疎外ということを簡潔にいつている言葉で、だから労働者の労働は自発的なものではなくて強いられるものであり強制された労働である。それはつまり、ほんとうに自己の生命がそこにあらわれてきて、そういう生命の深いところからの要求で働いているのではなくて、強制されて働いているのにすぎないのだということ、マルクスがすでに一世紀も前にいつておりますが、現代ではそれは非常につき進んだ状態であらわれておりまして、疎外の時代とか、人間性の喪失の時代というふうにいわれているわけなんです。こうなってくると労働が美德だというふな倫理感はちよつとなりたなくなるわけです。中世やまた近世初頭の職人の仕事というものは、これとは違った意味をもっていたといいい。いわゆる職人気質とか名人气質とかいうようなものを彼らはもっていて、仕事に誇りをもっていました。お得意さんから何か仕事をたのまれば、彼らは自分で材料を吟味して道具を整え、精魂をかたむけて仕事をして、出来上った製作品をみては我ながらほれぼれするというような、そういう気持を味うことができて、その出来上った作品に自己が表現されているという。自分の生命がその作品の中に流れこんでいるという、そういう意味あいがありました。だから仕事をなしとげたあとでは非常な喜びがありますが、仕事の最中、その工程においても喜びがあった。そして、仕事に誇りというものを持つことができたわけなんです。ゲーテが、ヴィルヘルム・マイステルの修業時代の中で、『美しい魂の告白』という章を書き上げた時に、深い感動に襲われて、さめざめと泣いたという話が伝わっておりますが、このような深い感動というものは、現代のような機械化された労働からはどうい感じることは出来ない。そういう味気ないものに今の労

働はなってしまうのであります。

こういうわけで、単純に労働は天職だ、労働は神聖だ、労働は人間の義務だというような倫理化をすることが、困難になるという事態が現われていると言っていると思われまふ。

今のは、ブルーカラーの仕事について述べたのですが、それでは、ホワイトカラー、事務員さん、会社員さん、そういうような人々の仕事というものは、生きがいを感じられる仕事であるかという点、これもそうではなさそうです。

だいたい、現代の官庁、大企業なんてものは、みな能率的に機能するためにビュロクラシー、官僚制機構というものを打ち立てている。官僚制機構においては、縦に指揮、命令系統というものが出来、横に役割の細分化が行なわれ、役割がどんどん分化して、細かくなりまして、ピラミッド型の官僚制というものが成立する。そして、それぞれの細分化されたポストには、職務、権限というものが明確に分り当てられ、各人はそれ以上にもそれ以下にも仕事をしないことになっております。

こういう状態になりますから、もうそこには、創意工夫をこらすというようなことは、考えられなくなる。そういう必要はなくなります。創意工夫をこらすような者は、官僚制機構の中では、働けなくなってくる。そして、こういう官僚制機構、組織というものは、人間から離れていつてしまひ、それ自体が独立して、自動的に動く巨大な装置、非情な機械装置というようなものになってしまふんです。この巨大な、非情な装置の中で人間が働く限り、出来るだけ人情とか、人間味といったものを殺して、非情な機械機構の中に、自分を適合させなければ、うまく働けないというようなことになってしまう。だからそんな所で働いている人間は、多かれ少なかれ、意識するとしなやかにかかわらず、自分の意志はたいへん無力なもので、自分の仕事は、本当に取るに足らないものだ、こういう無力感、無意味感というものにさいなまされているということなんです。

役人とか、官僚とかいう者が、冷酷な、非情なパーソナリティーになっていくというのは、それはそういう機構に
はめ込まれている限り、しかたないことだと言っていると思います。けれどもそのようにいばっている役人たちにし
ても、こういう機構の中で、仕事を割り当てられ、機構の指示ど通りに動かされているロボットでしかない。自分自
身に主体性も何も持っていない、あわれな存在でしかないのです。

このように現代では、ホワイトカラーにしても、自分の職業、仕事というものに生きがいをだんだん感じられなくな
って来ているということです。

人間疎外ということを考えますと、住居なんてものでも、近頃ではどうも非常に画一的なものが多くなって、住居
人の個性だとか、趣味だとか、そういったものを無視してしまつて、規格化された建て物が多くなって来ているよう
に思われます。私の京大時代の教え子に、ある大阪の企業に勤めたのがおりました、あるアパートに居住したので、
住所通知をよこしましたが、アドレスを読んで見たら何と書いてあるかというところ、大阪市城東区〇〇町何丁目何番地
日本住宅公団関目第二団地箱型十五号館三〇六号と、書いてありました。その後その男が来た時に、『お前んとこの
あの住所はなんとかならんかね。あんなに長かったら電報でも打とうと思つたら、あの欄に書ききれないじゃない
か』、『それに、大小屋じゃあるまいし箱型十五号館なんて言わなくても、もつと何か気のきいた言い方があるそう
なものじゃないかね』と言うと、笑いながら、『箱型とか、星型とかいろいろありましてね、やっぱり箱型と書いても
らわないと、手紙が来ないんですよ』というので、私も『ああー人間も箱型十五号館に住むようになったらおしまい
だね』といって、笑ったことがありました。そんなもので現代では、住居にかんしても、人間疎外が起り来つとある
と言っているでしょう。

ある人は、『十九世紀においては神々が死んだということが問題であつたが、二十世紀の現代においては、人間が
死に瀕しているということが問題である、古代から中世にかけては、奴隷や農奴にされることが、人間の恐れであつ

たが、二十世紀の現代においては、ロボットにされるのが、人間の恐れである』と言ったことがあります。これは人間疎外、疎外された人間というものを簡潔に表現した言葉なんで、現代はこのような自動人形化、ロボット化という人間疎外の時代に、だんだんなりつつあるということがあります。

じゃ、人間疎外ということが、どうして起って来るかと言いますと、これはある意味では必然なことと言っているのです。文化が発達して行くためには、一度疎外を起すほかはなかったと言わざるをえません。

疎外ということは、どういうことかと言いますと、自分が労働者となれば、生産するためには、労働者の内なるものが、外に表われる。つまり外化するということが必要なんです。ドイツ語で *Veräußerung* と言いますが、外化することが必要なんです。それを対象化といってもいいんです。文化というものが形成されるためには、内なるものが外に対象化されて、外化されるしかないわけなんです。ところが、外化されたものは、もともと人間が作ったものでありながら、それが逆に人間を支配するようになるとき、それが独立して、力を持って人間を支配するようになる時に、疎外ということが起こるわけであります。これが疎外の論理というものです。もともと人間が、作ったものでありながら、外化して出来たものがそれ自体に力を持って、人間を支配するようになる。

偶像崇拜というものも、ある意味ではこういう疎外の意味を持っています。人間が手で作ったものを人間が礼拝しているというのは、それがやっぱり疎外だということになるわけです。偶像崇拜を人間疎外の原型であると言っている人もあります。ところが、生産をし、社会文化を発達させるためには、人間の内なるものが外化するということは必然なことでもあります。そして、外化が疎外に転じるわけでありますから、疎外ということもある歴史的時期には必然なことになります。従って、われわれに課せられている課題は、疎外を、疎外された人間性というものを、もう一度とりもどすということが要求されているわけです。疎外の克服ということが要求されているわけです。疎外の克服ということとは、ある意味では否定なんです。それをとりもどすということは、否定の否定になって、そこに弁証法的

発展が認められると考えるわけであります。そのためには、人間が主体性というものを回復するということが必要なことになると思います。人が万物の尺度になるということが大事なんです。プロタゴラスがギリシャの昔、「人間は万物の尺度である。」と言った、人間疎外ということは人間が万物の尺度であることをやめた瞬間から起って来たことなんです。だから我々は人間というものを万物の尺度に、人間を再び王座に据えるという方向に、今後進んで行かなきゃならないと思うんです。

こうして、仕事、労働というものが変質して、そういう労働は神聖だとか、天職だとか、人間の義務であるとか、そういうことが段々言いにくくなる。人間は生きる為に働くのでなく、働く為に生きるんだ、労働する為に生きるんだというふうに教える事が困難になって来たんです。こんな無味乾燥な単純な節肉運動を反復するような仕事をやる為に、自分は生まれて来たのかということになれば、そんな事なら生まれて来ない方がましだったと誰でも言うだろうと思います。そういう風な事態が起って来ている訳なんです。

それではその事態を免れる為に、原始の労働と遊戯が渾然一体となっていたような、そういう時代に帰れと言いたくなります。けれどもそれは不可能なんです。或いは中世や近世のはじめの職人の誇り高き仕事に帰れというようなことを言ったってそれも不可能な事なんです。まあそういう風に、帰ったら、生活水準というものは非常に下がってしまったって、例えば未開社会の人間というものは、採集経済の段階で生きており、飢饉になれば何も生産物の貯えはないんですから、皆が死んでしまうわけで、そういう時代に帰ることがよいこととは決して言えません。

われわれはどうしても後戻りすることはできませんから、どこまでも前向きに進んで行って、出来るだけ機械を発達させて人間の品位を貶すような労働、単純な節肉運動の反復といったような、労働はこれからは機械が全部するようにしたらいと思う。そして人間は機械を管理して機械を使うようなそういう時代になれば、機械に支配されるのではなくて機械を支配するような、そういう時代が来るだろうと思うわけです。

でこうしてその生活水準がある程度上昇致しますと、労働時間というものがうんと短縮して、余暇というものが多くなってくるという事態が出来てくるわけなんです。まあここに私の言う閑暇時代というものが出現するだろうと思ふのです。

これから先は少し夢物語みたいになりますすが、けつして妄想ぢやないと私は思いますね。で、或る社会学者が今後は仕事がパーソナリティを形成するんぢやなくて、レジャーがパーソナリティを形成する時代が来るだろうといつてます。昔はどういう仕事をしているか、どういう職業に従事しているかということに依つてパーソナリティが、だいたひ判定できるというふうに考えられていましたが、今みたいなこの仕事というものが、人間疎外を起こすようなそういう仕事の質に変わってきますと、むしろ仕事をやっているとということよりも、仕事をやめてそのレジャーをどのようにな過しているかということに依つて、その人の人と為りというものは形成されてくるのであります。でそういう時代がやがて来るだろうと言われております。まあこういうふうに考えてくると、人間疎外を克服する為には、閑暇の増大ということが一つの有力な方法であるということとはまちがいないと思われれます。

でこうして閑暇が多くなることによってわれわれは全面的な発達、全体的人間として自己を実現するというようなことがだんだん可能になってくるであらうというふうに思ふんです。だから、閑暇というものは非常に大事なものになつてくると思われれます。マルクスという人は閑暇の、——マルクスは自由時間という表現を使つておりますが——人間の全面発達にとつてもつ意義、その重要性ということをはつきり言つてゐる人です。マルクスはこういうふうに言つています。「この自由時間は個人を全面的に発達させる為の不可欠な条件である。」自由時間——私に言わせれば閑暇ですね——閑暇というものが、偏向して発達するんぢやなくて人が全面的に発達して行くために不可欠な条件だと言つています。人間を全面的に発達せしめる為には、物質的生産のために費さねばならない時間が短縮されて他の活動のための時間が特に政治的・科学的ならびに芸術的な活動のための時間が残るようになることが必要だ。とい

うようなことを言っています。人間が全面的に自分を発達させる為には、物質的生産のために費さねばならない時間というものがあるべく短い方がいいとマルクスは言っているわけですが、こういう点マルクスは非常に誤解されているんじゃないかと思っています。

マルクスがプロレタリアートは歴史的使命である革命をやる、と言っていますから、そういう物質的生産に従事することは、非常に立派なことと考えていたかという、必ずしもそうじゃないですね。そういう時間はなるべく短くなつた方がいいとマルクスは言っていますから。物質生産に従事するような全面発達を阻害するような時間は短縮された方がいいとはつきり言っていますね。物質的生産のために費されねばならない時間が短縮されて他の活動のための時間が残るようになれば全面発達ということはできないのだとマルクスは言っています。そこで又富とは人々が自由にしうる時間のことであつてそれ以外の何物でもない。富とは物質的な物ではなく、物質的な財というものでもないマルクスは言っております。人間にとって富とは何かというと人々が自由にできる時間のことである。それ以外の何物でもない。労働時間は富の創造的実体である。労働している時間はやはり財を作り出すものですから富の創造的実体である。しかし自由時間、即ち私の言う閑暇は人々が自由にしうる時間は、富そのものであると言っています。自由は富そのものである、労働時間は富を作るけれども自由時間というものはそれから出てきた富である、富そのものだ、と言っています。このように自由時間、閑暇の人生にたいしてもっている意義というものを高く評価していることは意外な感じを持たれると思います。

そこで歴史的に見ますとその閑暇の意義を認めたのはギリシャ人です。アリストテレスは閑暇、*skole* スコレ、即ち暇を人間生活の最高の位置に置いたのです。ギリシャ人は閑暇生活というものを価値高く評価していたのであります。ご存知と思いますがスコレというギリシャ語からスクール学校という言葉が出て来たわけです。学校のもとの意味は暇ということなのです。だからやはり学問とか教育というようなものは暇がなければできないということを言葉

じたいが現わしているようです。しかし、閑暇というものはそのための教育が必要であつて、その教育が行なわれな
いと使い方がわからないものなのです。金の使い方がわからないものがいつ時にどつと金を手に入れるとろくな使い
方を致しません。そのように暇・閑暇の使い方のわからない者がいきなりレジャーを与えられたらろくな使い方をし
ません。

この世界の先進国の中で最も閑暇の使い方を知らなかったのはアメリカ人です。かれらはプロテスタント倫理をも
つてアメリカの歴史を始めている。いきなり資本主義から始まつていと言えますから勤儉力行禁欲主義の道徳をも
つて働いて資本主義の王国を築いたわけで、彼等はレジャーを正しく使う教育を何も受けていないから、また歴史的
にそういうものを持っていませんから、アメリカ人のレジャーの使い方はメチャメチャでそのやり方がまた日本にや
つて来ますが、アメリカで今交通事故で一番多いのはモーターボートの事故だといわれています。それはレジャーが
週休二日になつて今までは近くで遊んでいたものを今ではモーターボートを自動車に乗せ何マイルも離れた人造湖へ
行き、猛烈なスピードで飛ばしている。そして事故を起している。

アメリカ人のレジャーの使い方はまあこのようなものです。かれらはレジャー教育というものを全々受けていない
国民なのです。ころいうわけでレジャー教育というものが必要なことが分るでしょう。レジャー教育を受けていない
者がいきなり多くのレジャーを与えられるとろくな時間の使い方しかない。スパルタの国は戦争している間は安定
していたのですが、帝国を築いて、戦争から解放されて平和になつた。そして、平和のもたらした閑暇の使い方とい
うものをスパルタ人は知らなかったのでやたらと怠惰と悦楽のために時間を使った。それでスパルタは崩壊したとい
われている。スコレーの使い方を知らなくて、ただ退廃と怠惰な生活を送るようになれば、国でも崩壊するようにな
るとも起ってくる。現代では、科学技術が非常に発達して生産性が向上し、生活水準も高まつてレジャーも増してく
るのが目に見えて来ますが、そのレジャーを怠惰と悦楽のために過すならば、スパルタの末路を我々も又辿るだろうと

思うのです。そこにレジャー生活の困難な点がある。しかしレジャーが次第に増してくるということは間違いないことです。これからしばらくしたら、一日四時間働いて週に四日働けばいいという日が来るだろうといわれています。現在アメリカは週五日制で、一日八時間、ソ連は五日制で一日六時間働いている。日本はレジャーといっていますがまだまだ残業を入れると大体十時間働いているようですね。まだまだですね。このような日本の現状を見れば、閑暇生活なんて言えたぎりではないと考えられますが、しかし遠い見とをしをすれば、こういうことも考えなければならぬと思うのであります。中世のヨーロッパでは一年間の休日が一一五日あったといわれています。全くのんびりしていたんですね。今の日本はおそらく一年間に七十日足らずの休日があるだろうと思われます。それが週休二日位になると次第に多くなってきました。労働時間の短縮ということは、労働の質が変わったからには、労働に従事しているかぎり、人間疎外ということが起るということになってくれば、労働時間の短縮ということは、正当な要求になつてきます。

現代企業家、経営者の側においても労働時間の短縮はけしからんと頭から否定することはできなくなっています。つまり労働時間の短縮ということが正当な要求として認められる社会ということは、裏返して言う労働している時、人間が人間でなくなっていることなのです。だからせめて時間を短縮しようとするのが正当な要求として出て来ているといつてもいいと思いますね。しかしその閑暇というものは、私は大学生活というものは閑暇生活だといつていいと思いますが、ギリシャ人が考えた閑暇というものは、決してのらくら怠けて退廃的な享樂にふけることではなかったのです。ギリシャ人はスコレーというものを非常に *active* な活動をする時間だと考えていたんです。レジャー、スコレーというものは低級な肉体的労働から解放されて精神を啓発する活動的時間だと考えていたのです。ギリシャ人というのは肉体労働というものを軽蔑しています。これは奴隷がやるものだということで軽蔑しています。これにたいして、精神的な労働は非常に尊び価値高く評価した。だからスコレーというものは低級な肉体労働か

ら解放されて精神を開発するといったような活動的な時間だという考えをもっていたわけです。ギリシヤ人ははっきりそういう考えを持っていたのですが、日本人にも、かなりそういったものがあると思われれます。というのは貴族階級の存在した時代には、閑暇生活というものがあるわけですが、閑暇というものが文化を形成するに当って大きな要因になっていたことは事実なのです。「もしもきの大宮人はいとまあれや、桜かざして今日もくらしつ」といった歌があります。大宮人というのは桜をかざして遊んでいた。即ち「いとまあれや」は暇があるということなのです。日本人というのは閑暇ということを知っていました。しかしアメリカ人はそれを知らない。日本人は知っている。芭蕉の有名な言葉に「客半日の閑を得れば主半日の閑を失う」というのがあります。お客がやってきて半日の閑を得て結構楽しんだ。そのおかげで主人の方が半日の閑を失ったというわけです。この閑暇というものが、のらくらとして怠惰の時間なら失っても惜しくもないでしょうが、芭蕉にとつてやはり閑暇というものが大へん貴重なものであったということです。我々の先祖には、閑暇の意義を認めたという文化の歴史があるように私は思います。ギリシヤではそのために特に閑暇教育というものがなされたわけです。ソクラテスやプラトンやアリストテレスの時代には成人教育 adult education は、どういう形で行なわれたかという点、シンポジウムの形態で行なわれたのであります。シンポジウムということは饗宴とも訳されますが、つまり酒盛りということでもあります。今シンポジウムというと、学会等で何人か壇上に出てきて、あるテーマのもとにしゃべったりすることがシンポジウムと言われているが、ギリシヤ語のシンポジウムというのは酒盛り、酒宴、饗宴ということです。ギリシヤの成人教育の場というのは酒を飲んで学習をしたわけなんです。シンポジウムの場所で夕方まで食事をして酒を飲んで、価値ある友だちと会話をし、すぐれた音楽を聞き、すぐれた文学や哲学について談じるというのがシンポジウムでして、なかなか酒落れたものですね。成人教育という場というものがそういう場であつたと言われていますが、また皆が輪になって酒を飲みながら今述べたような閑暇教育というものをする。マートルというのは、白い匂いのよい花の咲く木ですが、ビーナスの

神木といわれるこのマートルの枝を次々に回し、それを受け取った人は自作の詩を朗読するとか或いは他人の叙詩とか叙情詩を吟じ、或いは優雅にダンスをしてみせたりしなければならないことになっていたのです。それが教育だったのです。スコレーというのはこのような教育をする時間であつたわけです。ところが、こういう席である將軍がマートルの枝を渡されたのですが、この人は戦争ばかりしていたので詩も作れないし、詩も歌えないし、ダンスもできない唐変木だったのです。こういうことはギリシヤでは実に恥ずかしいことだった。將軍が詩も読めなければ詩も歌えない、哲学の議論も何もできなかったということは、後世では想像もできないくらい恥ずかしいことだったんだといわれています。まあギリシヤ人というのはこういう生活をしていたのですね。こういうレジャー生活をやつたのですが、ギリシヤの文明というのは、90%の奴隷の労働の上に10%の自由民がレジャーをスコレーを享樂することができたのであります。そういう点、人道主義的に考えれば非難されるべきものがあつたと言わざるをえません。しかし、現代では、機械がすばらしく発達してきましたから、ギリシヤ時代の奴隷に変わるに機械をもつてすることができるようになっております。ギリシヤ時代にはたつた10%の自由民しかスコレー、閑暇生活ができなかつたけれども、機械を使うことによって大多数の者が閑暇生活を享受しうる時間をもつようになるであらうということは疑いのないことです。ですから閑暇生活というものが決して怠惰な退廃的な生活をするものであつてはならないと強調したいわけです。

ところで、閑暇レジャーとかいう考えのどこかに未来に憬れるユートピア的のがあります。しかしこのユートピアは正しい方向を示していると言つていいと思います。これに対して、コッケンランド逸樂郷の思想があります。これは、地中海のどこかに浮かんでいる島ですが、そこに行く川にはミルクが流れていて丘は皆砂糖でできている。そして何でもそこにはない物はない。野原を歩いていて焼鳥が食べたいと思うと焼鳥が空からパッと降りて来て口の中にはいつてくれる。そんな社会がコッケンランド逸樂郷といわれているものです。ここでは仕事をやること

は、悪いことで仕事をやった者は罰に脚の骨を折られるそうですが、ここである閑暇生活というものが何かそのような逸楽郷みたいな方向と考えたら非常に誤りであります。

これは墮落と退廢の生活でしかなく、閑暇生活というものは、そんな苦勞とか骨折りとか努力のない生活を言っているのでは決してありません。閑暇のユートピアと怠惰のコツケンランドとは本質的に異なったものであります。かつてギリシヤ人が考えたスコレーは少くともそういうものではなかった。例えば作曲家が作曲をしている最中というのはふつうの楽しいとか喜びとかいうのではなく、苦しいというほうがあたっているかもしれない。その苦しい中に喜びがあるわけです。或いは発明家の仕事というものも、苦しい努力を伴っているのです。閑暇生活というものはそういうものであり、そのような創造的な活動をやる時に人間疎外を克服することができなのです。疎外されない生活の中に、つまり創造的活動の中に喜びがあるのですね。閑暇というのは、何かのための手段として営まれるのではなく、それじたい望まれた自由の時間の使い方をいうのであります。ここに人間疎外の克服があるのです。そういった仕事を促すような時代が来るかもしれないということを言っていると思います。やがて閑暇というものがだんだん増えますからこれからはそのような閑暇の意義を、人生にとって閑暇のもつ意義をよく考えていかなければならないと思うのです。先に言ったように大学生活とは私のそういう意味では閑暇生活だと思うのですが、怠惰なのらかな怠ける時間では決してないというように言いたいですね。まあこのような閑暇が増えてきますと、人生というものが非常に今までと違った意味を持つてきて、仏教の示す生活思想というものもこういう時代になると再認識されてよい、又再評価されてよい、と素人考えで考えたりしているわけです。